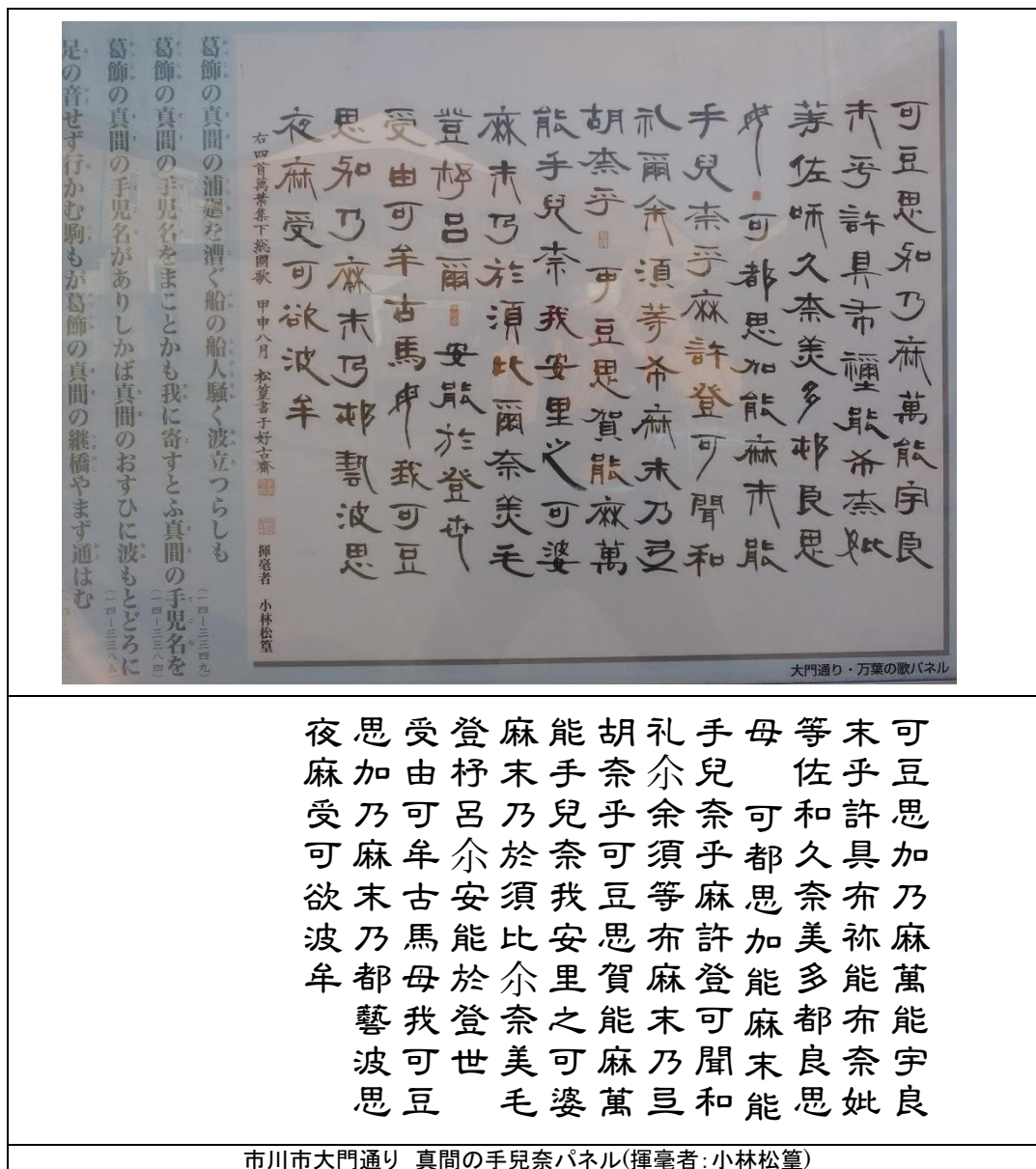




市川市大門通り 真間の手児奈パネル(揮毫者:小林松篁)

高知地学研究会はただ今、令和7年度会員を募集しております。

令和7年度会員数および年会費(令和7年5月8日現在)						
正会員	大学生会員	中高会員	小学生会員	家族会員	名誉会員	合計
17					2	19
2,000 円	1,000 円	800 円	500 円	3,000 円		

高知地学研究会 会長 南 寿宏

E-mail hirot@ark.ocn.ne.jp

関東平野に見る縄文海進

南 寿宏

高知地学研究会会報第 61 号において、縄文海進について触れた。その際に引用した新版地学事典の事項を再度引用する。

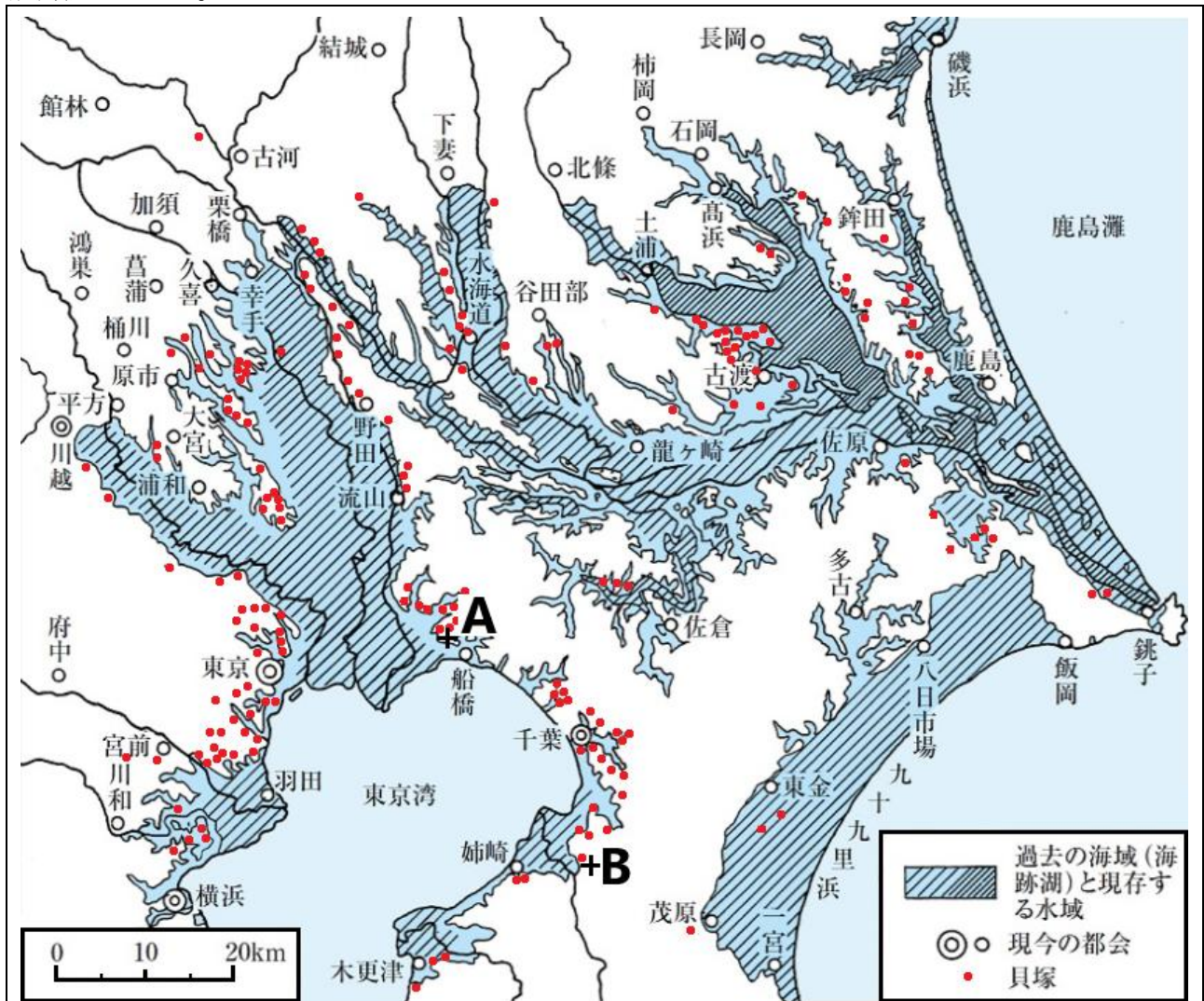
縄文海進(ジョウモンカイシン)Jomon transgression

完新世初期(約 1 万年前)に始まり、中期(7,000~5,500 年前)に最盛期を迎えた海進。有楽町海進・後氷期海進・リットリナ海進と同義。関東平野の縄文時代貝塚の貝が海生種を含むことや、その分布から海進期の存在を解明。現在よりも海が陸域の奥まで浸入したのは縄文早期以後、海水準の最高頂期は縄文前期の約 6,000 年前で、海面は現在より約 2m 高かった。それ以後海退に転じ、縄文晩期から弥生前期にかけて海面は現在よりも 1~2m 低くなり埋積浅谷や三角州の形成が進んだ。最終氷期に始まり、完新世中期に至る海進の後半に当たるが、その全体を意味するヨーロッパのフランドル海進を指すこともある。

[那須孝悌・遠藤邦彦, 地学団体研究会編 新版地学事典]

上記の説明文中の『関東平野の縄文時代貝塚の貝が海生種を含むことや、その分布から海進期の存在を解明』したのは、東木龍七(1926a), (1926b), (1926c)である。

これらの東木論文中の図は、東木の後輩研究者の追加調査を加え、いろいろと編集されているので、それらの一つに着色編集し、下に引用する。図中の赤丸が貝塚を表しており、当時の海岸線の推測根拠である。

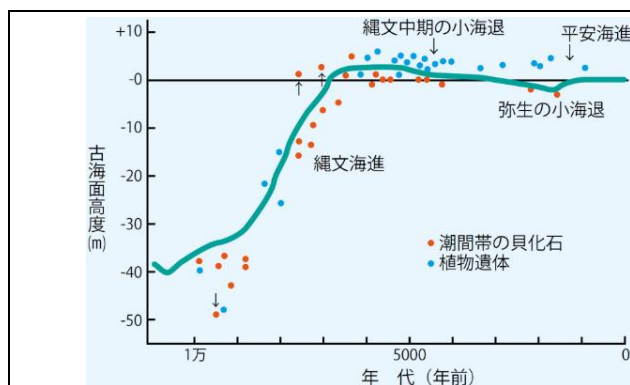


関東平野の旧海岸線(葛飾区 HP を編集)

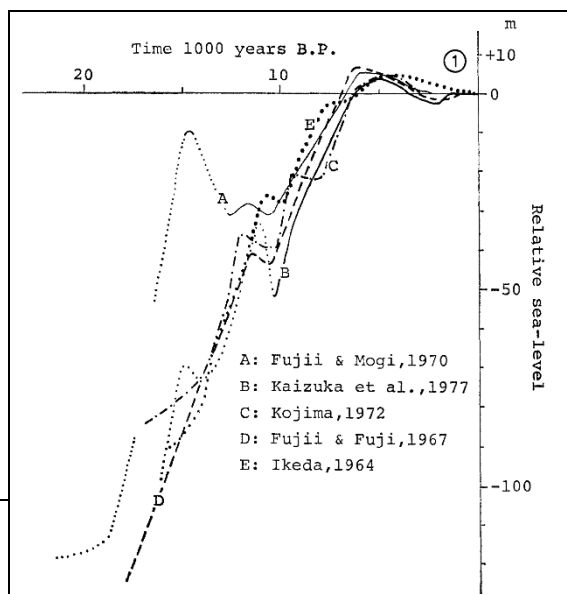
・ は貝塚 Aは下総国府(千葉県市川市) Bは上総国府(千葉県市原市)

完新世の海水準変動について、太田ほか(1982)から引用する。太田ほか(1982)では、日本各地の海面変化曲線を①関東・東海地方、②北海道・東北地方、③大阪・濃尾地方、④中央日本及び西日本の日本海沿岸地方、そして⑤房総半島・琉球諸島の5地域に分けて示した。右図は①関東、東海地方の海面変化曲線であり、5つの研究のグラフが一つにまとめられている。これらの曲線から、完新世における最高海面の年代は5,000～6,000年前ごろ、高度は3～8.5mである。

右図でははっきりしないが、海水準は弥生時代に低下、平安時代には上昇している。そのことを、葛飾区HPから示す(下図)。



海面変化曲線(葛飾区 HP による)



	時期($\times 10^3$ y.B.P.)	高度(m)
A:	6	8.5～5.5
B:	5	3
C:	6	5
D:	6	6
E:	5	3

関東・東海地方の海面変化曲線と海進最頂期の時期および高度(太田ほか(1982)による)

この海面変化における平安時代の海面上昇は平安海進とよばれる。奈良～平安時代のいくつかの文学作品から推察されるが、万葉集に関しては後稿に譲り、本稿では更級日記を紹介する。

京都の中流貴族の菅原孝標(たかすえ)は、上総の介として任地の上総の国に赴いた。千葉県は北から、下総・上総・安房の3つの国に分かれていた。1020年、任期を終えた孝標は、上総国府から下総国府を通して帰京した。更級日記は、そのとき、孝標の女(むすめ)が下総国府を通るときに見たことを晩年にまとめたものである。帰京当時、彼女は13歳だった。

十七日のつとめて、たつ。 十七日の早朝、 出発する。	
昔、しもつさの国に、まののてうといふ人住みけり。 昔、下総の国に、 真野の長という人が住んでいたという。	
ひきぬのを千むら万むら織らせ、さらさせけるが家の跡とて、深き河を舟にて渡る。 匹布を千むら万むら織らせ、 晒させた人の家の跡という、深い川を舟で渡る。	
昔の門の柱のまだ残りたるとて、 大きな柱、河の中に四つ立てり。 昔の門柱がまだ残っているとして、大きな柱が、川の中に四本立っている。	

孝標の女が下総国府を通っているとき、深い川を舟で渡った。川の中に柱が4本立っている。不思議に思って尋ねると、昔建っていた真野の長という人の家の柱だったという。真野の長は『ひきぬのを千むら万むら織らせ、さらさせ』たというから、ずいぶん大きな家だったのだろう。その家が深い川の底に沈んでいる。短期間で海水準がかなり上がったことが読み取れる。

【文献】

- 東木龍七(1926a): 地形と貝塚分布より見たる関東低地の舊海岸線(一), 地理学評論, vol.2, no.7, p.597-607
 東木龍七(1926b): 地形と貝塚分布より見たる関東低地の舊海岸線(二), 地理学評論, vol.2, no.8, p.659-678
 東木龍七(1926c): 地形と貝塚分布より見たる関東低地の舊海岸線(三), 地理学評論, vol.2, no.9, p.746-774
 太田陽子・松島義章・森脇 広(1982): 日本における完新世海面変化に関する研究の現状と問題

—Atlas of Holocene records in Japan を資料として— 第四紀研究, vol.21, no.3 p.133-143

勝鹿の真間の手兒名

南 寿宏

昔話に、「妻争い伝説」というパターンがある。複数の男性が一人の美女を求めて争い、それを悲嘆した美女が命を絶つというものである。竹取物語のかぐや姫はその一例であり、室戸ユネスコ世界ジオパークの「びしゃご岩」伝説も然り。万葉集にも、芦屋の菟原娘子(うなひをとめ)、櫻兒(さくらこ)、縵兒(かづらこ)、そして今回の葛飾の真間の手兒名(ままのてこな)の伝説の歌が載っている。なお、手兒奈は手兒奈とも表現するが、本稿では手兒奈に統一した。

それぞれの歌の番号は次のとおりである。

菟原娘子	1,801	1,802	1,803	1,809	1,810	1,811	4,211	4,212
櫻兒	3,786	3,787						
縵兒	3,788	3,789	3,790					
真間の手兒名	431	432	433	1,807	1,808	3,384	3,385	3,386 3,387

本稿は、真間の手兒奈の歌を紹介する。

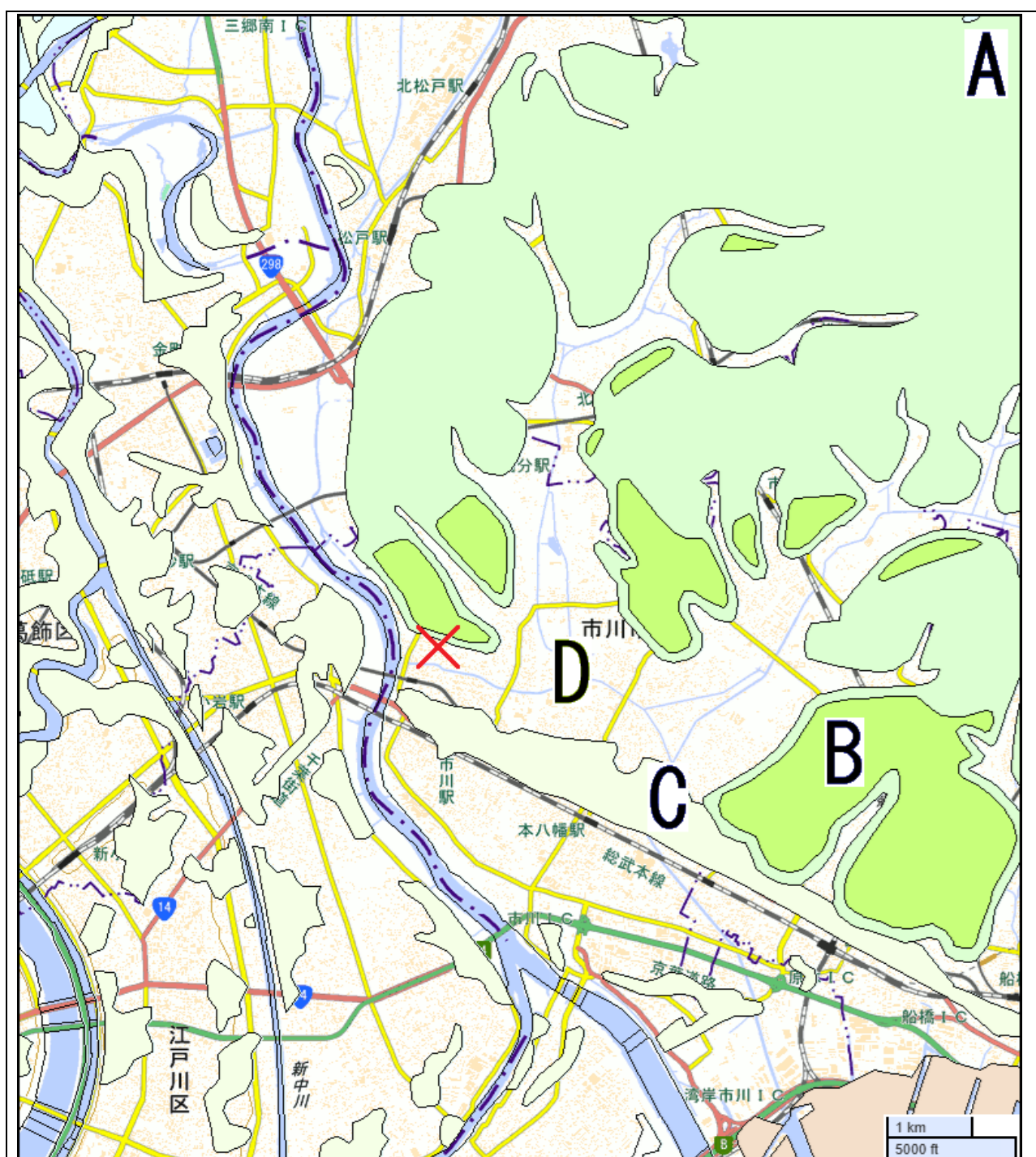
過勝鹿真間娘子墓	山部宿禰赤人	作詞一首	并	短詞	
勝鹿の真間の娘子が墓を過ぐるとき	山部宿禰赤人が	作る詞一首	并せて	短詞	
かつしかのままのをとめがはかをすぐるとき	やまべのすくねあかひとが	つくるうたいつしゆ	あはせて	たんか	
古昔	有家武人之	倭文幡乃	帯解替而	廬屋立	妻問為家武
古に	在りけむ人の	倭文幡の	帯解きかへて	伏屋立て	妻問ひしけむ
いにしへに	ありけむひとの	しづはたの	おびときかへて	ふせやたて	つまどひしけむ
ずっと昔	いたという男が	倭文織りの	帯を解き合つて	寝屋を立て	共寝をしたという
勝壯鹿乃	真間之手兒名之	奥柳平	此間登波聞杼	真木葉哉	茂有良武
葛飾の	真間の手兒名が	奥つ城を	こことは聞けど	真木の葉や	茂りたるらむ
かつしかの	ままのてこなが	おくつきを	こことはきけど	まきのはや	しげりたるらむ
葛飾の	真間の手兒奈の	墓は	ここと聞いたのだが	真木の葉が	茂っているからか
松之根也	遠久寸	言耳毛	名耳母吾者	不所忘	万葉集 卷三 431 山部宿禰赤人
松の根や	遠く久しき	言のみも	名のみも我れは	忘らえなくに	
まつのねや	とほくひさしき	ことのみも	なのみもわれは	わすらえなくに	
松の根のように	遠く久しいからか	言い伝えも	名前すら私は	忘れられない	
吾毛見都	人余毛将告	勝壯鹿之	間々能手兒名之	奥津城處	万葉集 卷三 432 山部宿禰赤人
我也見つ	人にも告げむ	勝鹿の	真間の手兒名が	奥つ城ところ	
われもみつ	ひとにもつげむ	かつしかの	ままのてこなが	おくつきところ	
私も見た	人にも告げよう	葛飾の	真間の手兒奈の	眠っているところを	
勝壯鹿乃	真々乃入江余	打摩	玉藻苺兼	手兒名志所念	万葉集 卷三 433 山部宿禰赤人
勝鹿の	真間の入り江に	うち靡く	玉藻刈りけむ	手兒名し思ほゆ	
かつしかの	ままのいりえに	うちなびく	たまもかりけむ	てこなしおもほゆ	
葛飾の	真間の入り江に	靡いている	美しい藻を刈ったという	手兒奈が偲ばれる	

『真間の手兒奈』の『真間』は崖を、『手兒』は女の子を、『奈』は～ちゃんを意味する。手兒奈のいたところは現在の千葉縣市川市真間町と考えられている。赤人の433により、当時の真間には玉藻を刈ったという入り江が広がっていた。そのことは、次の3,385でも示される。

可豆思賀能	麻萬能手兒奈我	安里之可婆	麻末乃於須比余	奈美毛登杼呂余	
勝鹿の	真間の手兒奈が	ありしかば	真間のおすひに	波もとどろに	
かつしかの	ままのてこなが	ありしかば	ままのおすひに	なみもとどろに	万葉集 卷十四 3,385
葛飾の	真間の手兒奈が	いたから	真間の磯辺に	波まで打ち寄せていたんだ	作者未詳
豆知識					
(本歌の表記は、1字1字が対応する非略体歌。)					
(おすひは汚水ではなく、磯辺(いそへ⇒いそへ)の方言。当時の東国の方言が分かる一級資料である。)					

万葉集に掲載の歌は8世紀前半に詠まれたもので、手兒奈伝説はそれ以前のものである。当時は海水面が現在よりも高く(平安時代以前ではあるが、平安海進と呼ぶ。本会報 p.3 参照)、崖下に波が打ち寄せていた。

そのころの海岸線は、いくつか予想されている。本稿では、p.5 に産総研シームレス地質図のものを、p.6 に市川市立市川考古博物館展示のものを載せる。



市川市周辺 地形地質図
 (産総研シームレス地質図を編集)
 縄文時代は A,B が陸地、手兒奈の時代は A,B,C が陸地
 × は手兒奈霊神堂

A N35.7574 / E140.0067 / 標高25m Q3_sb 堆積岩 形成時代 新生代 第四紀 後期更新世 岩相 汽水成層ないし海成・非海成混合層	B N35.7297 / E139.9710 / 標高24m Q31_std 堆積岩 形成時代 新生代 第四紀 後期更新世前期 岩相 段丘堆積物	C N35.7239 / E139.9358 / 標高2m H_svd 堆積岩 形成時代 新生代 第四紀 完新世 岩相 自然堤防堆積物	D N35.7370 / E139.9305 / 標高3m H_sad 堆積岩 形成時代 新生代 第四紀 完新世 岩相 谷底平野・山間盆地・河川・海岸平野堆積物
---	--	---	--



約 4,000 年前(縄文時代)の市川市の推定海岸線
市川市立市川考古博物館展示(同館長転載許可 令和 5 年 1 月 9 日付 No.138)

真間の手兒奈伝説とは、次のとおりである。

葛飾の真間は、どこで井戸を掘っても、塩水が湧き出た。しかし、1つだけ真水が湧き出る井戸があった。これが真間の井戸である。

葛飾の真間に、手兒奈という美女がいた。彼女はこの真水が湧く井戸でいつも水を汲んでいた。

彼女は多くの男に言い寄られたが、誰にもなびかなかった。彼女に言い寄った男たちの間には、いざこざが絶えなかった。

手兒奈はそのことを嘆き、真間の入江に身を投じた。翌日、手兒奈のなきがらは、浜に打ち上げられた。里人たちは彼女を真間の井戸のそばに手厚く葬った。

現在、真間の井戸は「亀井院」というお寺の庭にある。亀井院の向かいには、手兒奈を祭った「手兒奈霊神堂」がある。

市川駅から亀井院までは、上図で古市川湾と呼ばれる干潟が広がり、『真間の継橋』という橋が架かっていた。この橋の名は現在、長さ数 m の橋として残っている。橋のたもとの喫茶「つぎはし」のサイフォンコーヒーは絶品。下写真は、つぎはしを南から望んだものである。



真間の井戸
R5/1/9 撮影(南寿宏)



つぎはしと喫茶つぎはし

高知地学研究会 30 周年

会長 南 寿宏

1 発足

高知地学研究会が発足したのは、1995 年(平成 7 年)3 月 21 日だった。この 1995 年は、1 月に阪神淡路大震災が起こった。また、発足会の前日には地下鉄サリン事件が起こっている。

当時、高等学校地学は採用校が少なく、地学教員も削減、ますます授業時数が減っていくという悪循環に陥っていた。また、大学で地学を専攻する学生も、減少しつつあると聞いている。

そのような時、高知大学理学部の吉倉紳一教授が発起人となり、地学の進歩と普及を目指し、地学愛好者のための会を作ろうという話が持ち上がり、発足式を迎えた。発足式では、会則や役員等を決定して会の形態を整え、今後の運営方針を話し合った。その後、岡村眞高知大学教授の記念講演が行われた。発足会は高知新聞の取材を受け、同紙 3 月 23 日付け朝刊に掲載された(会報本号 p.12 に再掲)。

初代会長は川澤啓三氏、副会長は川添晃氏が選任され、両氏は以後 12 年間、本会の運営にあたった。吉倉先生には、顧問として本会の活動への強力な指導をいただいた。会を運営する役員は高校教員・中学校教員、大学院生らから選び、多くの分野に活動がいきわたるように心がけたが、適する人材が少ないことが多く、必ずしもその目的をかなえていない。

2 活動

本会の活動は、総会・講演会、地学巡検、会報発行を 3 本柱に、その他小中学生向け講座、絵はがきの出版等、多岐にわたった。

(1) 総会・講演会

総会は、本会の昨年度の活動を見返し、新年度の活動方針を決定する、本会最高機関であるが、それだけでは会が固くなりすぎるので、総会後続けて高知大学の豊富なスタッフの協力のもと、講演および最新の研究成果の発表会を行った。発足当初の講師名を列举する。

平成 7 年度	岡村 眞 先生
平成 8 年度	岩井 雅夫 先生 学生発表 5 名
平成 9 年度	堤 浩之 先生 教員発表 3 名
平成 10 年度	石塚 英男 先生 菊地 直樹氏
平成 11 年度	鈴木 堯士 先生

以降、ベテラン・中堅の先生、赴任早々の新進気鋭の先生、大学外の地質専門家の講演を毎年行った。

(2) 地学巡検

地学巡検は毎年 2 回、近距離(県内)の日帰り巡検と遠距離(県外)の一泊巡検を行うことを目標とした。ただし、日程等の都合上、県外の日帰り巡検、県内の一泊巡検も行っている。発足 30 年で 50 回の巡検を行ったので、ほぼ予定どおりの巡検ができていると、評価する。

第 1 回は佐川町鳥ノ巣、第 2 回は越知町横倉、第 4 回は室戸市羽根町登など、県内の有名な露頭だった。(第 3 回は高知自動車道の南国インター工事現場で緊急に化石採取を行った。)それ以降の具体的な行き先は、過去何回か会報で報告したし、入会パンフレットにも載せてあるので、省略する。

(3) 会報

会報 1~4 号は、作成原稿を高知大学の印刷機でコピー、ステープラー綴じだった。5~55 号は業者依頼だったが、業者の廃業に伴い、56 号以降は会長自宅印刷に切り替えた。自宅印刷は丸 1 日かかったが、業者印刷が発注して納品まで 1~2 週間を要するよりは短時間かつ廉

価で印刷できている。

バックナンバーを見てみるに、発足当初は会長・副会長をはじめ、大学教員、大学生等の研究発表の機能を持っていたことが伺える。

- ・鈴木堯士「四国はどのようにしてできたか裏話」「四国の石灰岩と蛇紋岩」(号数省略)
- ・田代正之「御所浦町と地(質)学」
- ・川添晃「牧野富太郎と佐川の化石」
- ・理学部3回生有志特別寄稿「吾北を切る！」

また、当時は会員が一人で地学巡検できるような、ガイドとしての記事が多かった。

- ・街角の地質博物館「高知市営球場西側公園の花崗岩」「高知市中心街の化石」他
- ・高知の地質アラカルト「朶(はらみ)と朶のジャン」「高知市北山南麓の白亜系」他
- ・夏休み地学見学スポット「八釜甕穴群」他

バックナンバーが号数を増やすにつれて、エンターテイン的な記事の割合が徐々に増えている。最近では地学にあまり興味がない人、例えば鉄ちゃん、歴女、万葉集愛好家等にも手に取ってもらえるような記事が増えている。

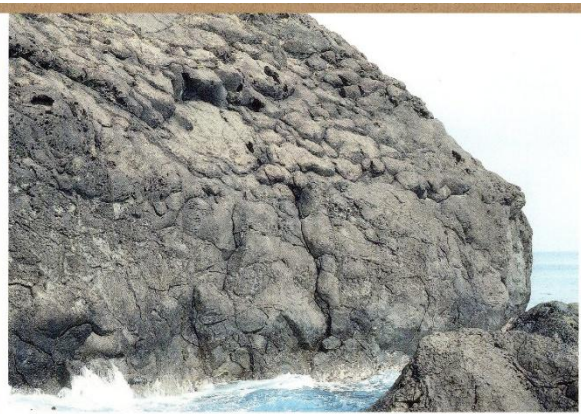
- ・ジオロジー鉄道の旅「坪尻」「新改」「とさでん交通後免編」他
- ・万葉集の地学「白鳳時代最大のスキャンダル 但馬と穂積」他
- ・源氏物語の地学「石山寺珪灰石」他

(4) 出版事業

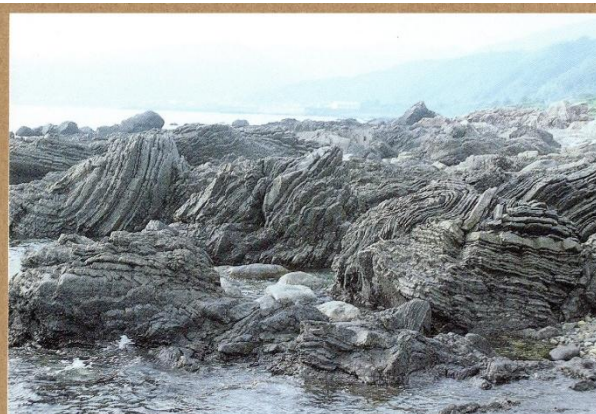
本会発足時の事業計画に「写真・ビデオライブラリーを作り、会員が有効に利用(後略)」とあり、それが会則第3条「出版物の刊行」となり、絵はがき発行につながった。

本会発足翌年の1996年、絵はがきセット「現地に見る地球の生い立ち四国地質ガイド第1集」が南の風社から2,000組発行された。本絵はがきセットは室戸市から宿毛市までの書店で発売され、また、県内各地に居住する会員がそれぞれ数組買い取り、転売することで、数年ではほぼ完売した。事務局の手元には保存用に数組残っているのみである。

定価 800 円×2,000 組=1,600,000 円となるが、もちろんこれが丸ごと会の収入になるのではなく、印刷社、書店それぞれの収入等を差し引くと、赤字にはならない程度であった。売上収入が入るまでは、会長・副会長の立て替えだったように記憶している。



室戸市日沖の枕状溶岩



室戸市行当岬のスランプ層

本会発行絵はがきセット(8枚組)より2枚を抜粋

この絵はがきセットが第1集ということは、第2集、第3集も発行されたように聞こえるが、第1集発行以来29年、未だに実現していないのが現実である。

県別の地質案内本は、築地書館、コロナ社のシリーズものが出ていたが、今は両者とも絶版のようである。本会も、設立時に刊行を目指して執筆・編集をしていたのだが、いつの間にか立ち消えになった。

手元にある高知県関係のガイドブックは、次のとおりである。これらは、今も手に入るか

も知れない。

- ・鈴木堯士(1998): 四国はどのようにしてできたか
- ・鈴木堯士・吉倉紳一編(2012): 最新・高知の地質 大地が動く物語
- ・朝倉書店(2016): 日本地方地質誌 四国地方

3 安定期

設立時は手探り状態で試行錯誤しつつ運営してきた本会だが、設立して数年経過すると、過去の活動を参考にして会を運営できるようになってきた。創立して12年本会を運営してきた川澤・川添の初代会長・副会長が勇退後、南寿宏・竹島洋文コンビが2代目会長・副会長として後を継いだ。運営は過去の運営を踏襲し、安定した運営を心掛けてきた。会の運営は安定して行われたので、本節の題を安定期としたが、慣性期もしくは惰性期といった表現が適当かも知れない。(あるいは、マンネリ期?)

4 トリプルパンチ

元号が令和に替わったとき、本会はトリプルパンチに見舞われた。

- ・吉倉紳一氏の離高
- ・covid2019 パンデミック
- ・会員の退会および新入会員の減少に伴う会員数の減少

このような状態が現在も続いており、今現在を辛口に評価すれば、低迷期とか衰退期とかと表現できるのではなかろうか。

故事成語に「座して死を待つ」という語がある。本会の現状はまさにこの語のとおり。本会は、これにどう対処すべきだろうか。

幸運なことに、平成の時代の会員数が多かった時の年会費の貯金がまだ少額ながら残っているので、これを資金に、高知地学研究会の再興を図るべきではないか。

5 再興を目指して

上述のように、本会は会員数が年々減少し、先細り状態である。そこで、今年に入り、会の再興を目指すいろいろな営業活動を行った。本稿でそれらを報告する。

(1) 入会案内パンフレット(以下、「パンフレット」と表記)の作成・配布

会の存在の周知のために、パンフレットを作成、県内の博物館・図書館等の施設にお願いし、「お持ち帰りコーナー」に置いてもらった。

ありがたいことに、各施設は好意的で、コーナーに置くことを快諾してくれた。

(2) 会報バックナンバーの寄贈

会報は、数年前よりオーテピア高知図書館3階の高知資料コーナーで開架されているが、高知県は広く、高知市から遠方の地に在住の方には不便である。そこで、もっと多くの方に本会報を読む機会を持っていただこうと、県内いくつかの施設に寄贈した。今回新たに寄贈に応じてくれたのは、次の各施設である(東から西の順に列記)。

室戸世界ジオパークセンター	安芸市立図書館	香美市立図書館「かみーゆ」
香南市立野市図書館	南国市立図書館	高知県立大学附属永国寺図書館
高知大学メディアの森	いの町立図書館	土佐市立市民図書館
佐川町立図書館	越知町立横倉山自然の森博物館	

各施設の書架場所の空き状況その他の都合で、全ての場所で開架されているわけではなく、書庫に保管されている施設もあるので、見当たらない場合は司書さんにお聞き願う。

須崎市以遠にはまだ営業ができていない。後日行いたいと思う。

会報全68部×施設数の印刷のため、用紙代、プリンターインク代がかかったが、先行投資

としてお認めいただきたい。各施設に新会報を送る際には、補充パンフレットを同封する予定である。

(3) 小中学生へのはたらきかけ

オーテピア 5 階の高知みらい科学館では、小中学生を対象に、いろいろな活動を行っている。同館館長高橋信裕氏のご好意で参加児童・生徒及び保護者に接触の機会をいただき、本会の活動の周知、入会を図っている。単に案内文書を配布するだけでは不十分で、子どもたちへの指導にも携わり、信頼関係の確立を図っている。先日、小学生 18 名と高知城の地質を観察し、久々の楽しい時間を過ごした。小学生は必ず保護者同伴なので、家庭への周知も期待できる。

(実は、この活動は以前から計画していたが、実施直前に新型コロナのパンデミックとなり、5 年遅れた。)

小中学生の会員が増えれば、彼らを対象にした本会主催の地学巡検が開催できる。高知みらい科学館の集客力は大きいので、同館との共催で多くの参加者が見込まれ、入会につながる事が期待される。

(高知みらい科学館と協議する必要があるが、同館で受付業務をしてもらえるかも知れない。5 年前の同館との協議では協力をお願いできそうだったが、同館の担当者が変更になり、再度の協議が必要である。)

(4) 高知みらい科学館内のパネル展示

高知みらい科学館には、展示室中央に高知コア研究所、室戸ユネスコ世界ジオパーク等のパネルが展示されている。高橋館長の格別のご好意で、高知地学研究会コーナーを設けてもらった。同じパネルが長期間展示されると飽きられるので、担当の M 氏に無理を言って年に数回は展示替えをしてもらいたいと思う。可能ならば、パネルの近くに本会のパンフレットを置くことで、新規入会につながる事が期待できる。

展示済みのパネルは、県内の上記施設で巡回興行を……。夢は広がる。

(5) 現会員の勧誘紹介

会報送付の際、パンフレットを数部同封する。お友達にお声がけをしていただければ、幸いである。

「もっと送れ。いっぱい配っちゃお。」という声は大歓迎ですよ、シンジ君、チエちゃん！

(6) その他

あと、他に何ができるだろうか。

高知みらい科学館とは、行事を共催する方向で話が進んでいる。それに加えて県内には、地質に関する施設が他に数か所ある。東から、室戸世界ジオパークセンター、佐川地質館、横倉山自然の森博物館等である。また、横倉山自然の森博物館の谷地森秀二学芸員が音頭をとる高知自然史博物館(仮称)や土佐清水ジオパークもある。これらの団体との連携・共催をとることも選択の 1 つである。

次に、県内マスコミ(新聞社(高知新聞・全国紙高知支局)・放送局(地元地上波 4 社・各地ケーブル TV 等))に取材を依頼することが考えられる。室戸ジオパーク発足時は高知新聞室戸支局の U 記者や全国紙の記者と親しくさせていただき、何度か取材も受け、紙面に掲載されたが、今はコネがない。どなたか、マスコミに顔が広い方はいらっしゃいませんか。

市町村の広報・HP への掲載依頼も可能と思われる。例えば、香南市 HP にはその種のコーナーがあるように聞いている。ただ、大手マスコミ等で取り上げられた後の方がより効果的に思う。

高等学校へのはたらきかけという方法もある。この方法は 20 年ほど前に一度試みたのだが、費用がかさむだけで、効果はなかった。

会員諸氏のお知恵を拝借できれば、幸いである。

編集後記

- 高知地学研究会は今年で 30 周年を迎えました。そこで、本号でその活動をまとめました。ごらんください。その中で、会員の皆さまに、本会の活動へのご協力をお願いしました。本会の入会案内パンフレットを数部同封しています。お友達へお渡しいただけたら幸いです。お友達といっしょに、楽しい時間を過ごしませんか。よろしく願います。

H7.3.23 高知新聞

子供の理科離れに歯止め

「高知地学研究会」を結成

県内の教育関係者ら

地学の面白さを知ってもらおうと、県内の大学の教授や小中高校の教諭、学生、社会人ら有志が「高知地学研究会」を結成。二十一日、高知市曙町二丁目の高知大学で発足式を行い、四国の地質現象をまとめた

本の刊行などの活動方針を決めた。子供の理科離れが進む中、県内では地学を開講していない高校や免許外教員による授業も多い。そこで地学の教師らが「阪神大震災で地学への関心が高まっている。地学教育振興のため、最新の研究成果を学び情報交換する場をつくらう」と計画。高知大理学部地学教室が中心となり、組織づくりを進めてきた。

発足式には大学教授や学生、教員のほか、地学に関心のある会社員、公務員など三十人が参加。会長に土佐高と高知大の非常勤講師、川沢啓三さんを選び、県内を中心に四国の地質の視察、研究発表会、会報の発行のほか、四国ができたメカニズムを写真や図を多用し子供にも分かりやすく示す出版物を刊行するなど活動方針を決めた。続いて、高知大理学部の

岡村真教授（海洋地質学）が阪神大震災の際の淡路島の被害調査結果を報告。「墓石の倒壊調査で、野島断層を挟んで山側の墓は南北に倒れ、海側は東西に倒れていた。断層のずれ具合から南北に倒れるケースばかりと思ったが、東西方向の揺れもかなり強かったことが分かる」などという話に熱心に耳を傾けた。川沢会長は「会で学んだことを学校教育にもフィードバックし、防災教育にも役立てたい」と意欲を見せていた。

参加希望者は高知大理学部地学教室（0888・44・8323）へ。

高知新聞 1995/3/23 朝刊

- 本会の隆盛を目指して、今年は営業活動を積極的に行っています。そのため、いささか予算を使っております。蒔いた種が芽を出し、成長してくれるかどうか。長い目で見ていてください。新芽のことを英語で、sprout というそうですね。sprout をそのまま食するのが、もやしや芽キャベツ。前川種苗にコーナーがあります。
sprout : a shoot of a plant;
sprouts: young shoots, especially of alfalfa, mung beans, or soybeans, eaten as a vegetable
(Oxford English Dictionary, Second edition)
- 訳 sprout : 植物の芽。
sprouts: 特にアルファルファ、緑豆、大豆の若い芽で、野菜として食べられる。（オックスフォード英語辞典、第2版）
- 本号は新プリンターにより A3 用紙を使用、A4 冊子印刷しました。裏写りが少ない用紙を探して、いろいろ模索しています。DCM で裏写りの少ない、いい用紙を見つけたのですが、A4 のみでした。山元文具の A3 用紙は、裏写りはほぼありませんが、お値段がかさみます(大汗)。Amazon で安くて紙質が厚いものを探していますが、領収書をくれるかどうか。今回はハーマットで購入したコピー用紙を使いました。
- 3 年ほど前、一時的に本会のホームページを作ったことを覚えていますか。その時は、サーバーの維持費に年に 15,000 円以上かかるということで、断念しました。このほど新会員の M 氏に月額 1,452 円のサイトにアップすることを提案されました。この価格なら維持できるかなと、前向きに検討しています。容量不足でもう少し維持費が必要かも知れませんが、何とかかなと思います。ホームページの制作は M 氏が申し出てくれています。アップ後の編集は M 氏と南が分担して担当することで素早い対応ができそうです。